

令和3年度 学校評価の結果（考察）

令和4年2月21日作成（最終）

12月に実施した学校評価アンケート（保護者・児童・教職員）の結果を以下のようにまとめましたのでご覧ください。

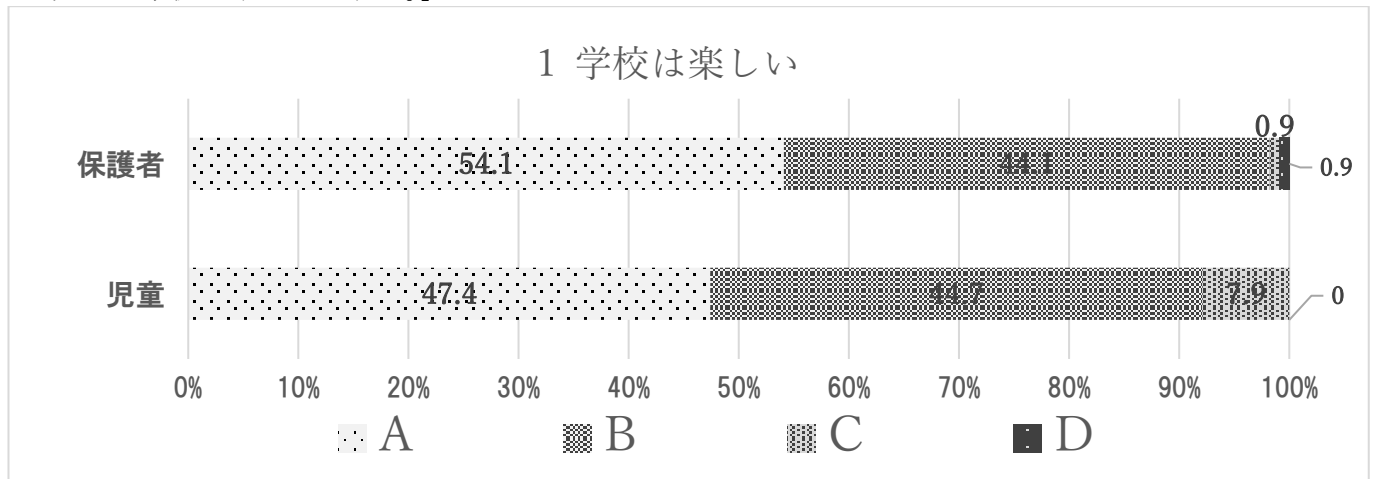
結果は、保護者と児童の比較を中心にグラフで表しています。項目に合わせて、教職員も含めて比較をしています。

- 1) 回答者（人数）：保護者（110名／未回答4名） 児童（114名） 教職員（15名）
- 2) 質問項目 グラフの上記に記載
- 3) 評価（4段階評価：「A」「B」「C」「D」）
 - ・積極的・肯定的な評価＝「A」 そう思う・あてはまる
「B」 だいたいそう思う・だいたいあてはまる
 - ・消極的・否定的な評価＝「C」 あまりそう思わない・あまりあてはまらない
「D」 そう思わない・あてはまらない

① 学校は楽しい

保護者「お子様は、楽しく学校にいつている。」

児童「学校は楽しいですか。」

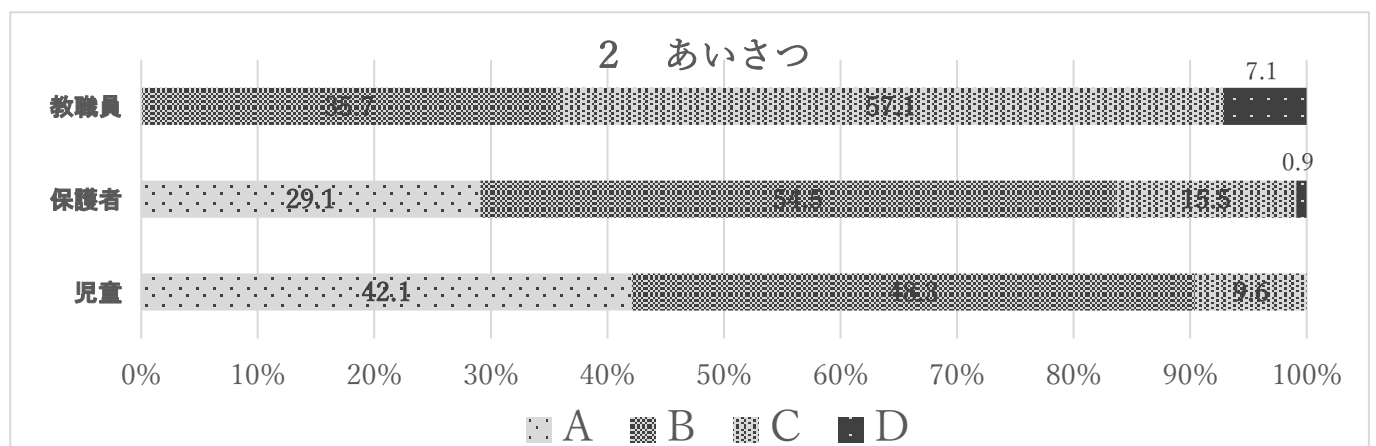


「学校は楽しい」は、児童、保護者ともに「A」・「B」評価を合わせて90%以上で非常に高い割合を今年度も示した。児童は学校が楽しい場所であると感じ、保護者はお子様楽しく学校に通っていると感じている。約8%と少数ではあるが、4年生以上の児童に「C」評価を回答している児童がいる。「勉強関係」「友人関係」が要因となっていると考えられる。学校生活を楽しく送るために、学校や学級の雰囲気づくりを大切にしていきたい。

② 「あいさつ」

教職員「児童は、自分からあいさつしている」

児童「自分から友達や先生、地域の人たちにあいさつができています」



保護者「お子様はあいさつをしている」

「あいさつ」は、保護者と児童で「A」・「B」評価が高く、教職員は「A」評価がなく、昨年度と同様に、肯定的な評価にギャップ（ズレ）が生じている。昨年度の教職員の評価では否定的評価（「C」）で83.3%であったが、今年度は否定的評価（C・D評価）が約20%減少している。このことから、昨年度と比較して児童のあいさつは改善されてきていると評価できる。しかし、児童の評価では否定的評価をしているのは1・2年の低学年児童であり、実際にあいさつを返さずに通っていく姿が見られる。また、あいさつしている児童のなかでも、自分からあいさつをするより、教職員からのあいさつを返す側の児童が目立ち、顔を見て（目を合わせて）のあいさつする児童が少ないのが現状である。

このようなことから、以下のようなことに取り組んでいきたい。

①名前を呼んであいさつをする。（「〇〇さん、おはよう。」）

②明るい声や表情であいさつをしていく。

③あいさつしている児童を、みんなの前で褒めていく。

④教職員が見本となってもっと積極的にあいさつをしていく。

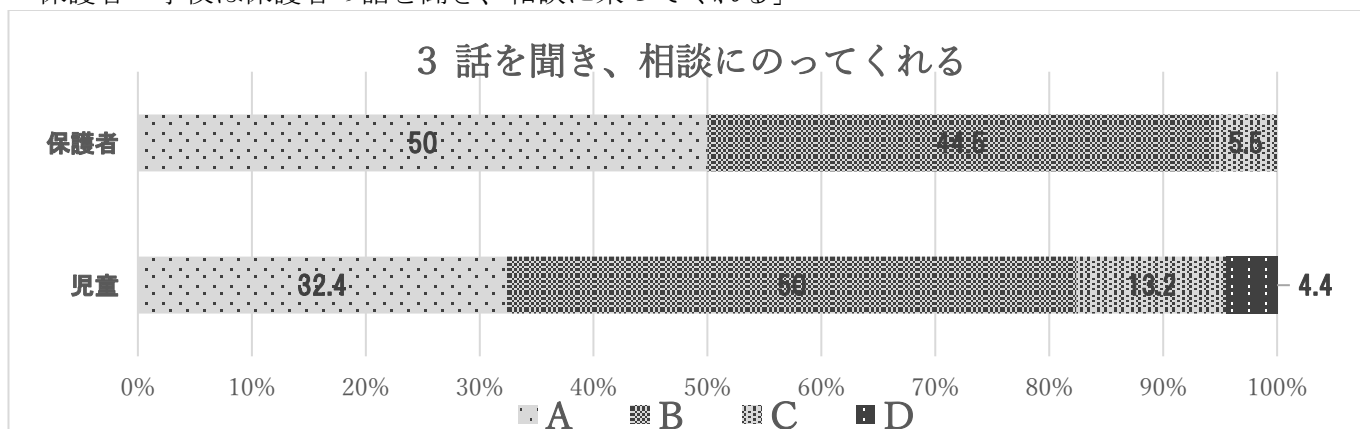
（元気なあいさつ・気持ちのよいあいさつ）

⑤あいさつの大切さを集会や学級等で指導していく。（特に低学年）

③「話を聞き、相談にのってくれる」

児童「何かあったときに先生にたずねたり、相談したりできますか。」

保護者「学校は保護者の話を聞き、相談に乗ってくれる」



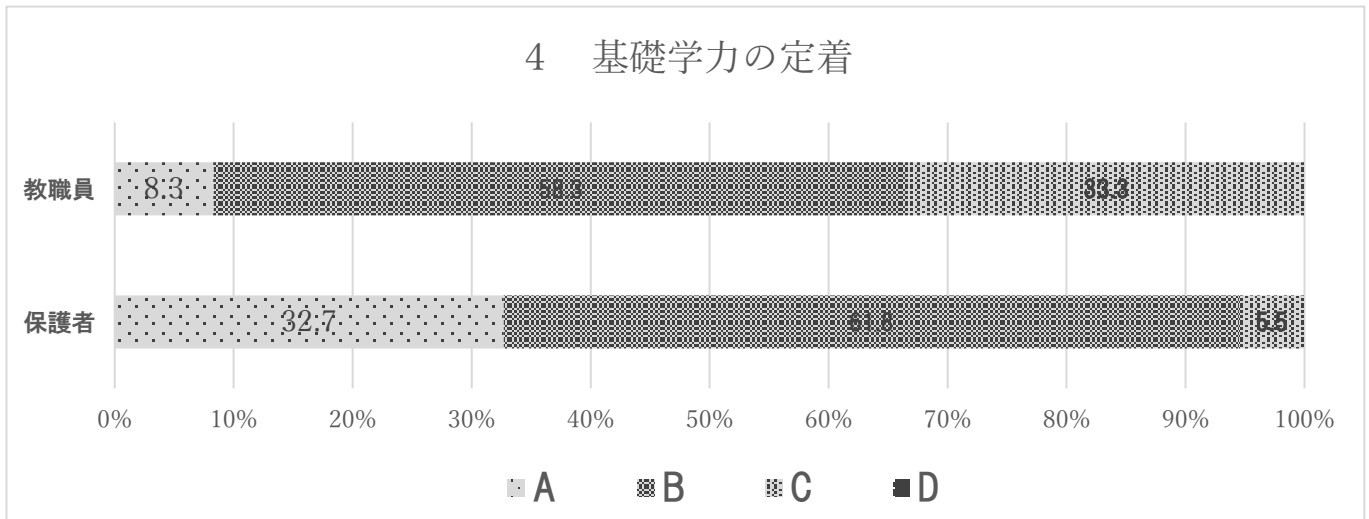
「話を聞き、相談にのってくれる」では、保護者で肯定的な評価（「A」＋「B」）が約95%、児童で約82%という高い評価であった。このことから児童にとって先生は話しやすく感じていることから、児童と先生との良好な関係が築かれてきている。しかし、児童の否定的な評価（「C」＋「D」）は昨年度より7%高くなっているので、時間の調整を図りながら児童と過ごす時間を作り出して行くようにしていきたい。また、昨年度から城東っ子相談を実施して、担任が全児童と面談する時間を設けているので、この相談を有効的に活用していきたい。

今後も児童、保護者との良好な関係を築きながらより一層信頼していただけるように教職員ひとりひとりが心掛けていく。

④「基礎学力の定着」

教職員「児童は、基礎・基本の力がついてますか。」

保護者「お子様は、読み・書き・計算など基礎・基本の力がついてきていますか。」



「基礎学力の定着」は、昨年度より10%ほど高い約94%（「A」＋「B」）で保護者はお子様基礎学力がついてきていると回答している。教職員も肯定的な評価は66%と昨年度と同程度であるが、「A」評価が8.3%（昨年度0%）の回答があった。「C」評価は昨年と同等（33.3%）で、学習の理解が不十分で、計算力・読解力が身に付いていない児童がいるとの認識である。そのような児童を中心に積み残しが多くなってきていることが課題としてある。

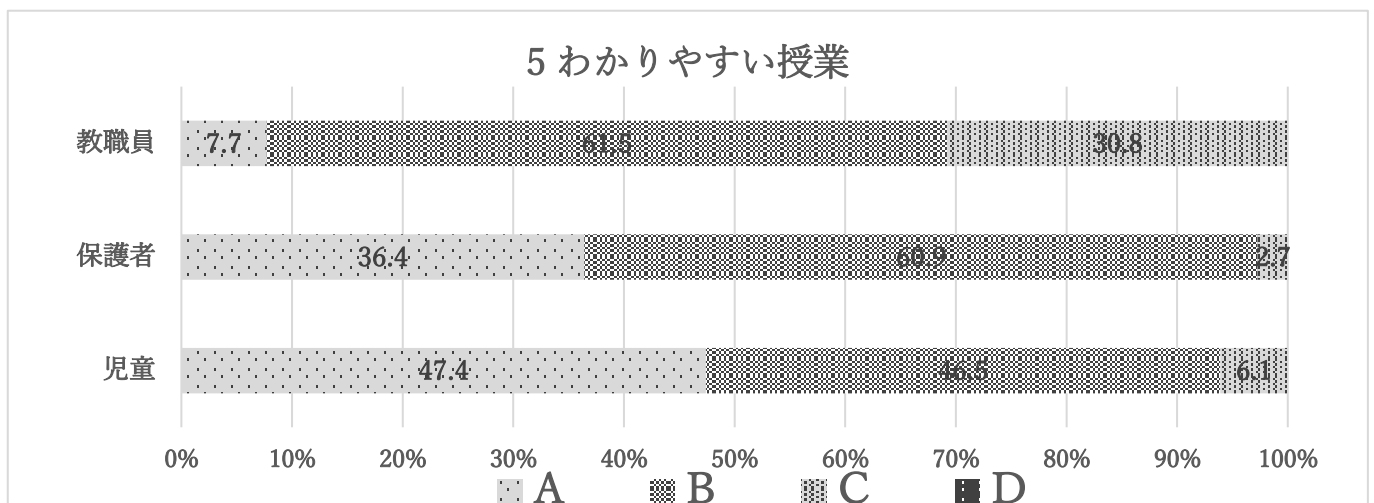
今年度もコロナ禍ではあるが、臨時休校をすることなく通常通りの授業時間が確保され、落ち着いた中での教育活動が展開されていることが、基礎学力の定着の要因の一つを考えられる。また本校では、朝の時間にスキルの日（火・木曜日）を設けて、既習の計算プリントを取り組んでいる。その場で採点し、間違ったときには、その場で指導を行うことで、計算力が付いてきている手応えも感じている。家庭学習は、算数（計算）、漢字、音読を基本に全学年で宿題として課している。学校で学習したことを家庭で復習することで、理解度を高めることにつながります。また、間違えた問題を解き直すことが重要なので取り組ませていきたい。

⑤「わかりやすい授業」

教職員「わかりやすい授業づくりを行っている。」

保護者「学校は、わかりやすい授業に努めている。」

児童「授業はわかりやすいですか。」



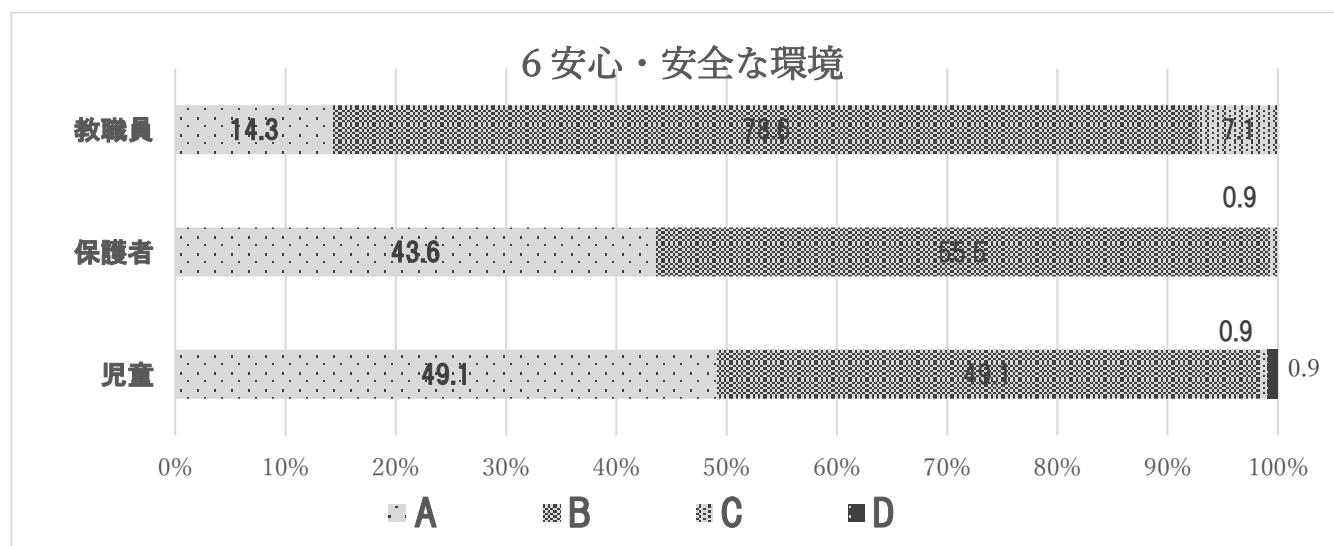
「わかりやすい授業」は、児童は肯定的な評価（「A」＋「B」）で94%、保護者は97%（昨年度＋7%）という非常に高い割合を示した。わかりやすい授業と評価してもらえることは、教職員にとって大変嬉しく励みとなる。教職員の評価では「C」評価が30%と昨年度より7%高くなっている。それは、日々わかりやすい授業するために教職員は追究をしているため評価を低く示している傾向がある。特に今年度はGIGA スクール構想によりタブレット型 PC を全児童が一斉に使用できるようになり、PC を活用した授業が進められた初年度でもあることから、「C」評価が高くなったとも考えられる。今後はPCを使った授業がスタンダードとなるために、デジタルとアナログの両方の良さを融合させながら、これまで以上にわかりやすい授業を目指して、全職員がPC活用を含めた授業づくりの研修を進めていく。

⑥「安心・安全な学校」

教職員「安全についての取り組みを行い、環境整備に努めている。」

保護者「学校は、安全・安心な環境が整っている。」

児童「安全や健康に気をつけて学校生活が送れていますか。」



「安心・安全な学校」は、児童が「A」「B」評価という非常に高い割合を示している。しかし、校舎内を走る、天候が悪いときに校舎内で暴れている児童が目立つことがある。また、ヒヤリ・ハットする場面もある。休み時間にあとには、保健室で手当てを受ける児童も多くいるように感じる。そのために安全指導の機会を増やしながらかきなけがや事故が起きないように未然防止に努め、今以上の児童の安全意識の向上を図る。保護者は、安心・安全な環境が整っていることを高く評価している。保護者の方は、安心・安全な学校にお子様を通わせたいのは当然である。そのため教職員は、安全管理をより徹底して、児童の安心・安全を確保していくようにしていく。

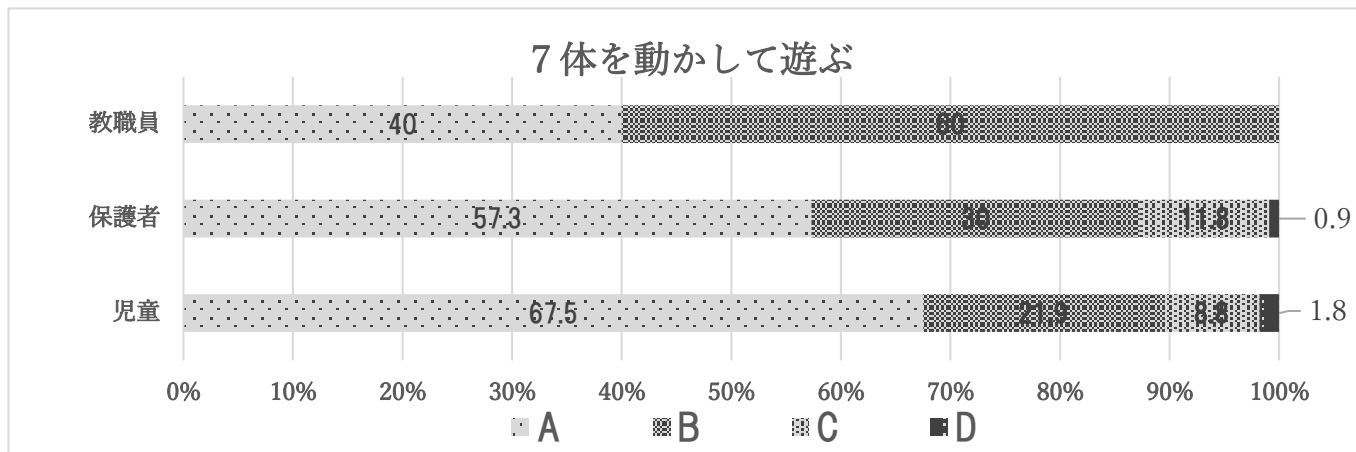
本校では、年3回避難訓練（火災・地震を想定）や引き渡し訓練を実施している。今年度は、大雨警報発令により保護者へ引き渡しを実施した。安全に引き渡しができたことは、訓練の成果である。他にも毎月1回校舎内外の安全点検を行い、危険箇所や不良箇所等を確認し、修繕・修理を行っている。また、長期休業日前には、安全担当・生徒指導担当が全校生に対して防犯や交通安全などの指導を行っている。

⑦「体を動かして遊ぶ」

教職員「児童は、元気に体を動かして遊んでいる。」

保護者「お子様は、体を動かし元気に遊んでいる。」

児童「元気に体を動かして遊んでいますか。」



「体を動かして遊ぶ」は、3者全てで、肯定的な評価（「A」＋「B」）の割合が非常に高いが、児童の「A」評価は昨年度より-13%となった。保護者の「C」評価も昨年度よりも増え、体を動かす機会が児童の中で減少している児童が増えているように読み取れる。

学校では体を動かして遊べるサンマ＝3つの間（時間・空間・仲間）が整っているが、家庭ではサンマの減少や習い事など時間の制約、さらにはゲームで遊ぶ楽しさが勝ることもありため、学校の休み時間は児童にとってとても貴重な時間である。遊びの様子として、ボールを蹴る遊び（サッカー）、ボールを投げる遊び（ドッジボール）、鬼ごっこでの遊びが多い。あたたかい時期には、鉄棒や登り棒など遊具で遊ぶ児童もいる。学年を越えて遊ぶ姿も見られる。児童にとって友だちと遊ぶことは学校生活を過ごすなかでも楽しい時間である。高学年になれば休み時間に委員会の常時活動があるため、低・中学年に比べると、運動場に出て遊ぶことをする児童は少なく感じる。

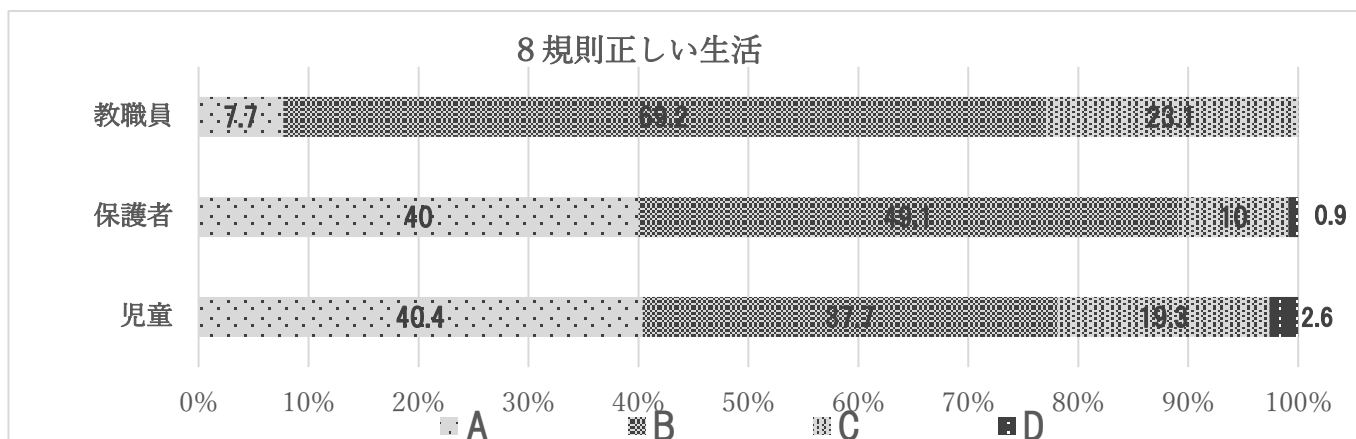
今年度から児童用パソコンが一人一台配備され、使用しやすい環境が整い、休み時間に使うこともあるため、児童の身体活動量の減少につながる。そのために休み時間のパソコンの使用法などについては、学校としての約束（ルール）を明確にして行かなければいけない。

⑧「規則正しい生活」

教職員「児童は、早寝・早起き・朝ごはんの定着が図られている。」

保護者「お子様は、規則正しい生活が送れている。」

児童「早寝・早起き・朝ごはんの規則正しい生活が送られている。」

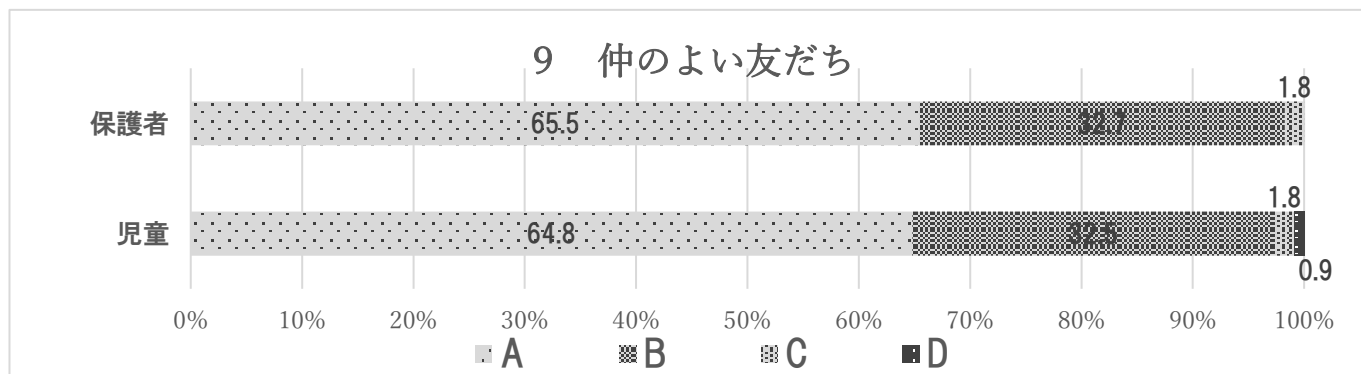


「規則正しい生活」は、保護者は昨年度と同程度の割合であったが、児童は消極的な評価（「C」＋「D」）が+8%高くなっている。このことから、生活リズムが乱れてきている児童が増えてきていることが伺える。最近の児童の様子として、「朝ごはん、食べていない。」という声も聞くことがあったり、夜遅いテレビ番組の話をしていたり、夜遅くまでゲームをしていたり、就寝時刻が遅くなり起床ができず登校の集合時刻に遅刻するなどする児童もいる。普段の生活から意識できるように児童への指導(食育や保健学習など)していき、児童だけでは改善が難しいので家庭全体で取り組んでいただきたい。

⑨「仲のよい友だち」

保護者「お子様は、学校に仲のよい友だちがいる。」

児童「遊んだり話をしたりする、仲のよい友だちが学校にいますか。」



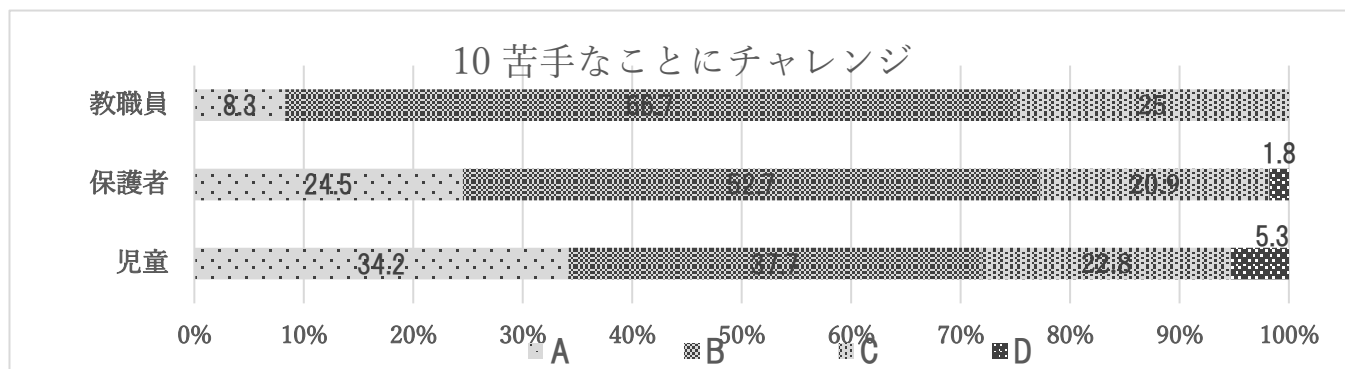
「仲のよい友だち」は、児童の95%以上が肯定的な評価（「A」＋「B」）であるが、昨年度より「A」評価は-22%であった。また、保護者のほとんどがお子様には仲のよい友だちがいると回答している（昨年と同様の評価）。一日の長い時間、児童は学校で生活するため、楽しく学校生活、楽しく学習や運動などをしていくためにも大切な存在であるので、これからも友だちを大切にしてほしい。若干ではあるが両者で否定的な「C」「D」で回答している。小規模校の本校では、幼稚園から単学級のため、みんなと仲良くなれたり、深い人間関係が築かれたりできる。一方で、人間関係が広がりにくく固定化や、固定観念（思い込み）で人を見てしまうこともある。そのため、些細なことが契機に関係性が崩れることがあり、様々な問題へと発展していく可能性があるため、教職員は普段から児童の様子を見ていくなかで、小さな変化に気がつけるように高くアンテナを立て、児童に接していかなければならない。

⑩「苦手なことにチャレンジ」

児童「苦手なことにもチャレンジしていますか。」

保護者「お子様は、苦手なことにチャレンジしようとしている。」

教職員「児童は、苦手なことにチャレンジしている。」



「苦手なことにチャレンジ」は、児童は72%（「A」＋「B」）が積極的な回答を示しているが昨年度より15%で、消極的な回答（「C」＋「D」）が28%（昨年度＋15%）と高くなった。消極的な回答の多くは、低学年と高学年で多かった。

このことは、苦手なことを回避したり、失敗を恐れている児童が増えてきている傾向があるように感じる。児童たちには、いろいろなことにチャレンジすることや、成功経験だけでなく失敗の経験も大切にして、自分の夢や目標の実現につなげてもらいたいと願っている。そのため、学校では学年に応じてたくさんの成功や失敗の経験を積み重ねながら、粘り強く最後まで取り組める児童の育成にも取り組んで行く。